台大日本語文研究第 34 期
2017 年 12 月，頁 55-78
2017-09-30 收稿，2017-11-03 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2017.34.55

川端文學與繪畫的交響——以〈白馬〉為例

范淑文*

摘要

川端康成在文學創作之餘，也極為熱衷繪畫等古藝術的收藏，跟幾位畫家時而談論繪畫，相交甚深，或許是因為具有如此之藝術背景，川端文學中時而穿插繪畫，我們可以從他的作品中看出他透過繪畫來創作文學的意圖。

在這些畫家中，川端最頻繁交換意見、談論繪畫的是東山魁夷，川端甚至在晚年時自己提議與東山嘗試繪畫與文學的交流，〈地〉〈不死〉〈曇花〉〈白馬〉等短篇小說就是在這種情況下完成的作品。

本稿中以川端〈白馬〉為探討重點，與東山留下之畫作〈白馬〉及以馬為題材之繪畫作比較，了解兩位藝術家如何欣賞對方之創作，並參考〈曇花〉〈晚霞中的少女〉等同時期之作品，探討理解川端文學時繪畫可以發揮如何之作用？繼而詮釋〈白馬〉的創作意圖。

關鍵詞：川端康成、東山魁夷、文學、繪畫、〈白馬〉

* 台灣大學日本語文學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

Symphony between Kawabata's Literature and Art – A Study on "Hakuba"

Fan,Shu-wen *

Abstract

A famed writer, Kawabata also had a great interest in fine arts and antique collections. He was closely acquainted with various artists and regularly corresponded with them. We can grasp a glimpse of Kawabata's background in arts through his integration of art works into his literature and his endeavor to gain inspirations through fine arts.

Among Kawabata's artist friends, he conversed most often and was most closely related to Higashiyama Kaii. In Kawabata's later years, under Kawabata's suggestion, the two artists experimented on collaboration between art and literature. The results are works like"Chi" (Ground), "Hushi" (Undead), "Gekkabijin" (Beauty under the Moon), and "Hakuba" (White Horse).

This paper will focus on the short novel "Hakuba", and compare it with Higashiyama's art works of the same title or same theme. Through understanding how these two artists appreciate each other's works, and referencing Kawabata's literary compositions from the same era "Gekkabijin" and "Yubaeshojo", this paper will try to reveal how artistic pieces affect Kawabata's literature, and uncover his motivations behind the creation of the short novel "Hakuba".

Key word: Kawabata, Higashiyama Kaii, literature, art, "Hakuba"

* Professor, Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

川端文学と絵画の交響——「白馬」を例として

范淑文*

要旨

川端康成は文学創作のほか、画など古美術のコレクションに大いに関心を抱いており、また多くの画家とも絵について語り合ったり、親しく付き合ったりしていた。そのような芸術の背景を持っているため、文学作品に絵画を織り込んだり、絵画を通して文学の創作を試したりしていたことは複数の作品からうかがえる。

それらの画家のうち、川端が最も絵画について意見を交わしたり、心を語り合ったりしていたのが東山魁夷である。川端の晩年には更に川端の提案で絵画と文学との交流が二人の間で試みられていた。その結果としては「地」、「不死」「月下美人」「白馬」などの作品が誕生した。

小稿では特に「白馬」という短編小説に焦点を据え、東山が残している〈白馬〉と題した絵画や馬を題材とした絵画と比較しながら、二人の芸術家が如何に相手の創作を捉えたか、また「月下美人」や「夕映少女」など同時期の作品をも参考にしながら、川端文学へのアプローチには絵画が如何なる働きを担っているのか、それに基づいて「白馬」の創作意図を明らかにしてみる。

キーワード：川端康成、東山魁夷、文学、絵画、「白馬」

* 台湾大学日本語文学科教授

臺灣大學學術期刊資料庫

川端文学と絵画の交響――「白馬」を例にして

范淑文

一、はじめに

川端康成は文学の創作のほか、絵画など美術を嗜み、それらのコレクションに熱中していたことはよく知られている。例えば、川端の最も傾倒していた画家の一人浦上玉堂の《凍雲篩雪図》と題した作品との巡り合いについて、「雪の繪では、浦上玉堂の「凍雲篩雪」などは私の好運であつた。（中略）旅行の道すがら途中下車をして、見知らぬ土地をバスに乗つて、一里ほど行きかへり歩いて、所蔵者の家を訪ねたが、見せてもらへなかつた。ところが廣島、長崎へ原子爆彈の視察に行つた歸りに京都へ寄ると、この繪が買へさうな話を耳にした。私はさつそく玉堂の墓に参つた。」[1]と、手に入れたいがために、それに関する情報が耳に入ったら、遠いところへ赴いたり、浦上玉堂の墓までわざわざ足を運び、死者の魂と語り合ったりするまでしたことを川端自身が「月下の門」と題した散文で語っている。そしてようやく昭和 25（1950）年 4 月に日本ペンクラブ会長として広島を訪れた帰り道に、玉堂の魂の結晶と称されるほどのこの傑作と対面し、手に入れることが出来た[2]。後、親しく付き合っている東山魁夷を家まで招き、その画を鑑賞させたこともあった[3]と伝えられている。富岡幸一郎は「玉堂の《凍雲篩雪図》は重要文化財

---

1 「月下の門」『川端康成全集』27 巻、P468

2 富岡幸一郎（2014.5）『岩波現代書 031 川端康成 魔界の文学』岩波書店）をも参照。

3 石川潤の「雪月花の時――川端康成と東山魁夷」という一文に川端が東山魁夷に《凍雲篩雪図》を見せたことが書かれている。「一九五五年、初めて川端邸を訪れた東山に、川端はこの絵を見せてもてなした。思い合わされるのは、東山が一九六一年の自作《雪降る》について語った言葉である。「絶え間なく降る雪。内に向って閉ざされた静寂の世界。後略」」石川潤「雪月花の時――川端康成と東山魁夷」監修:川端香里男（2014.4）『巨匠の眼　川端康成と東山魁夷』株式会社求龍堂、P356

臺灣大學學術期刊資料庫

そして国宝に指定された名画であるばかりでなく、この絵が川端という作家の魂と深く相通ずるものがあったのは特筆されなければならない。」[4]と、絵画に向かう川端の心境、川端が自分の気に入った絵を仰ぎ、彼なりの形で創作者と心の交流をしていたという見解を示している。

浦上玉堂や田能村竹田など故人であった画家のほか、古賀春江[5]や東山魁夷など同時代の画家とも芸術観やその創作についてしばしば語り合っていた。そのうち、東山魁夷に対して、「東山魁夷」（昭和47年1月）で「人生の邂逅の恵みによつて、私は再三、東山魁夷さんの畫集、版畫集、また文集などに、序文を書く幸ひを與へられた。」[6]とあるように、川端は東山の画集にしばしば序文を書いていたことがうかがえる。さらに東山の作品を自ら解いたりしていることからでは、東山は川端が最も深く付き合い、心を交わしていた画家と言えよう[7]。当時朝日新聞PR版の『四季』欄の編集に当った斎藤一は東山と川端との間で試みられていた絵画と文学の創作について、「また画家が思うままに作画し、作家はその絵を前において、絵のはたらきに呼応して文章を書いてゆく、という新しいゆきかたも経験した。川端康成、東山魁夷両先生の場合である。（中略）川端さんの『不

4 富岡幸一郎（2014.5）『岩波現代全書　031川端康成　魔界の文学』岩波書店、P7

5 川端は『「古賀春江」詩画集跋』、「古賀春江と私」（『川端康成全集』第27巻）など古賀の作品集に序文を記したり、自ら文を成して古賀芸術を称賛している。また、川端と古賀春江との関係について、上田渡は「少なくとも川端は、シュールレアリズムという新思想に傾倒していくなかで、古賀春江という同志を発見し、絵画というものに自己の文学の可能性を見つけようとしたことはまちがいない。」と言及している。（上田渡（1999.5）「川端文学と絵画」『川端文学の世界4　その背景』編者：田村充正・馬場重行・原善、勉誠出版、P280）

6 『川端康成全集』第28巻、P530

7 「東山魁夷は、川端が六篇もの東山讃の文章を書いていたこと、及び川端追悼の「星離れゆき」（昭47.5「新潮」）、それらをあわせ読むと、同時代の画家の中で最も川端の心と深くかよいあった人であったことがわかる。」と兵藤正之助も東山魁夷が川端が最も頻繁に交流していた画家だと言及している。（兵藤正之助（1991.9）「川端康成と美術」『国文学解釈と鑑賞』56巻9号、至文堂、P153）

臺灣大學學術期刊資料庫

死』『月下美人』『地』『白馬』の四篇はこうして出来上った。川端さんの発案であった。」[8]（下線引用者、以下同様）と回想している。このように川端は晩年に友人画家である東山魁夷との間で相手の作品へ傾倒しているのみならず、更に異なるジャンルへの鑑賞を通して新たに作品の創作に臨んでいたのである。

それらの作品のうち、上田渡は「白馬」が最も徹底的に東山の画を反映していると見なしている[9]。小稿では「白馬」に焦点を据え、東山の絵画〈白馬〉（以下、紛らわさないように、絵画を〈白馬〉、文学作品を「白馬」と区別して記していく。）及びその他の馬に関する作品を参考にしながら、川端の「白馬」やその創作意図を明らかにしてみるほか、一つのテーマを通して絵画と文学作品が如何に響き合うことができるのか、つまり、絵画を媒介とする文学作品の解き方を試みてみるものである。

二、川端「白馬」の読み方の可能性

夜中、深夜まで受験勉強をしている浪人の息子のことが気がかりで、主人公野口はその後中々寝付かないため、色々と空想した挙げ句、不意に天をかける白馬の幻が「暗やみで目をつぶつた野口に浮んだ。」[10]（P528）そして、その幻の白馬が「だんだんゆるやかになつて、遠くへ消えてゆくにつれて、野口も眠りに吸ひこまれた。」（P529）その白馬の幻はよく考えてみれば、子供の頃、妙子という幼馴染の女の子と一緒に描いていた馬の絵だったのである。以来、数年間この白馬の幻が野口の眠りの誘導に一役買っていたが、ある日の夕方、ベッドではなく、椅子に掛けながら起きている時に、その幻の白馬を見たのに野口は驚いた。ここ数年、年を重ねるに連れ、馬に乗っている女の姿がだんだん衰えてくるし、女の黒い服――子

[8] 斎藤一（1964.11）「覚え書」佐藤春夫『詩文四季』株式会社雪華社、P273

[9] 上田渡は「『白馬』（昭 38・8）は、東山の絵を全面的に取り入れた作品と言える。」と言及している。上田渡（1999.5）「川端文学と絵画」『川端文学の世界４　その背景』編者　田村充正・馬場重行・原善、勉誠出版、P290

[10] 「白馬」の引用は『川端康成全集』第１巻新潮社による。以下同。

臺灣大學學術期刊資料庫

供の頃妙子が描いた馬に乗っているピンク色とは異なっている黒い服――の後ろに更に黒い布が曳いている。野口は妙子――自分と結婚しなかったその女性――とは四十年も会っていない、と回想している、という粗筋である。

（一）川端「白馬」の創作に至るには

さて、川端が「白馬」のような作品の創作に至るには如何なる背景が考えられるだろうか。まずは川端の文学創作方法について、富岡幸一郎は「川端康成は昭和二十五年という年をひとつの境として、その「魔界の文学」へと入っていった。『山の音』に描かれる「通りかかつて山を鳴らして行つたかのやう」な、その「魔」はここから描きはじめられる。」[11]という見解を示している。昭和 25 年というのは、川端がペンクラブの会長として広島へ赴き、そこで平和宣言を読み上げた年であり、また、その浦上玉堂の《凍雲篩雪図》を手に入れた年でもある。富岡幸一郎によれば、広島で目にした原爆による焼跡の悲惨さからの衝撃が玉堂の《凍雲篩雪図》に描かれている雪に覆われている奥山の「惨澹」なる重苦しさと重なり、川端の心に印象深く残り、彼の文学創作に大きく影響を与えたのである。その影響とは即ち、真っ先に『山の音』を始めとする「魔界の文学」に川端の文学作風が変ったというのである。その後に創作された「白馬」もその系列の作品と見なす研究者もいる[12]。

一方、本来文学以外に絵画にも大変感心を示し、自ずから絵画の鑑賞や評論を屡々発表した川端は文学に如何なる形で絵画の要素を織り込むのかを常に考案していた。例えば、「月下の門」[13]に納めて

---

11 富岡幸一郎（2014.5）『岩波現代書　031　川端康成　魔界の文学』岩波書店、P13、14

12 羽鳥徹哉・原善（1998.6）『川端康成全作品研究事典』勉誠出版を参照。また、原善は「「白馬」そのものを魔界作品と呼ぶつもりはないが、少なくとも魔界の要素は読み取れるのであり、魔界の文学の中に位置づける事は可能なのである。」と、「白馬」を見なしている。原善（1981.5）「「白馬」論――幻の意味をめぐって――」川端文学研究会『川端康成研究叢書 9　魔界の彷徨』教育出版センター、P156

13 『川端康成全集』第 27 巻、P447-470

臺灣大學學術期刊資料庫

いる〈黒百合など〉というエッセーで百合について寸法を測る表現法を駆使しながら花の大きさ、形などを読者に伝えようと尽くすことやさらに、匂いまでの表現に工夫することが可能であるが、これは絵画ではどうしても叶わない点だと言及している。しかし、色になると、文学の限界があることも痛感している。このように絵画と文学のそれぞれの表現の特徴や限界まで考えていた川端は、当時朝日新聞 PR 版の『四季』欄の編集に当った斎藤一の叙述したとおり、川端自身の発案で昭和 38（1963）年に親友である画家東山と文学と絵画の交流[14]は「よほど呼吸（いき）の合った同士の場合にだけ限られる手法であろうか。」[15]と言われるほど互いに相手の作品をよく理解していたようである。東山が絵で語れば、川端はよく文学作品で語り返す、というようにその成果は大成功であった。

そのような状況で完成した川端の「白馬」はどのように読まれているのであろうか。最も早く注目された原善の「「白馬」論」[16]では「幻想の意味をその不可能性という点から論じ、〈魔界〉の問題として作品の位置を測定している」と、『山の音』などの川端の晩年の作品と同じく〈魔界〉の問題を取扱う作品だと「白馬」を見なしている。引き続き、小林芳仁は「また川端の晩年の小説「白馬」では、川端の「多年連用の眠り薬」(『古都』あとがき）の影響が窺われる。」[17]という、幻想に傾いた見解を示している。そして、森晴雄は幻想の雰囲気から離れることなく、テクストの内容を徹底的に分析し、馬に乗っている少女や身に纏っている物の変化、それらを見ている主人公野口の心境を解釈している[18]。以上の先行研究はいずれも幻想や小説の内容に沿った捉え方であり、絵画の観点、上述したこの

[14] 注 8 の内容を参考されたい。
[15] 斎藤一（1964.11）「覚え書」佐藤春夫『詩文四季』株式会社雪華社、P273
[16] 原善（1981.5）『川端康成研究叢書 9』教育出版センター／「白馬」【研究展望】羽鳥徹哉・原善（1998.6）『川端康成全作品研究事典』勉誠出版を参考。
[17] 小林芳仁（1988.10）『川端康成の世界――美と仏教と児童文学と――』双文社、P78
[18] 森晴雄（2011.2）「川端康成「白馬」（掌の小説）論 人生のさびしさ”と“長い黒布”」『解釈』47 巻 1・2 号、解釈学会編

臺灣大學學術期刊資料庫

類の作品の特別背景である東山魁夷の存在が見落とされている。こうした絵画と文学の交流の趣旨で創作されたこの一連の川端の小説を理解するには東山の絵画も役立つのではなかろうか。そして、川端の「白馬」を全般に見極めるには、東山の画〈白馬〉、また東山がその後に創作した馬の絵も考察の射程に入れるべきではあるまいか。

（二）東山〈白馬〉⇒川端「白馬」

川端の「白馬」と東山の絵画〈白馬〉など当時こうした絵画と文学の交流の趣旨に基づいた作品の創作時間について、森晴雄は以下のように調べた結果を示している。

> 「朝日新聞　PR 版（昭和 38・8・4）に発表された「不死」は、「月下美人」（昭和 38・8・11）「地」（昭和 38・8・18）「白馬」（昭和 38・8・25）とともに東山魁夷の挿画に触発されて執筆された掌の小説（四百字詰め原稿用紙で六枚）である。[19]

前掲した朝日新聞 PR 版の『四季』欄の編集担当の斎藤一の回想によれば、最初は深夜鎌倉（川端の住居）から出来上がった原稿を立川（東山魁夷の住居）へ急いで届けるという形でやっていく予定であったが、原稿のほうが遅れがちだったため、東山に先に絵を描いてもらい、川端が後その絵のモチーフや雰囲気に沿って小説を書いた結果になったのである。「白馬」もそのような状況で出来上がった作品の一つである。

さて、東山の〈白馬〉という絵を川端がどう捉え、如何に文字で綴り、どのように膨らませたのであろうか。前述したとおり、「白馬」のストーリーはとてもシンプルであるが、その中の幾つかのポイントを次に抜粋しておこう。

① 眠りの招きに使われる幻の白馬

> 眠れぬ夜がつづくうちに、野口は人生のさびしさに出合つた。息子には來年があり、希望を持つて、夜も寝ない。しかし、父親は床のなかでただ起きてゐる。息子のためにではなく、自分

[19] 森晴雄（2007.12）『川端康成『掌の小説』論』龍書房、P254

臺灣大學學術期刊資料庫

のさびしさをおぼえたのであつた。(中略）ある夜不意に、妙子の白い馬の繪を思ひ出したのであつた。その繪はよくおぼえてゐない。子どもの繪ではなくて、天かける白馬の幻が、暗やみで目をつぶつた野口に浮んだ。(中略)天かける馬の白い姿は明らかだが、馬上の人は形も色も明らかでなかつた。女子どもでないやうだ。（P528、529）

② 妙子と絵描きをして遊んでいた子供の頃の回想

「妙子よ。乗つてるのは妙子よ。白い馬に桃色の服を着て乗つてるのよ。」（中略）野口は妙子とは別な女と結婚をし、子どもができ、年を取つて、そんなことは忘れてしまつてゐた。(P528)

③ 幻の白馬（乗っている人）の移り変り

その幻の白馬の姿は生き生きとあざやかだが、乗つてゐるのはどうも黒衣の女のやうであつた。桃色の服の女の子ではない。しかも、その黒衣の女の姿は、歳月とともに、野口の幻でも、年取り衰へて、怪しげを増すやうであつた。（P529）

④ 現か幻か

椅子にかけながら起きてゐて、野口は白馬の幻が見えたのは、今日がはじめてであつた。(中略）妙子とはもう四十年も會つてゐない。消息もわからない。（P529）

①は眠れない主人公野口の心境や眠りの招きに使える方法を思案し、暗闇の中で幻の白馬の模様が浮かび上がった描写である。その幻の白馬とは、子供の頃妙子と絵描きをしながら遊んでいた時、妙子が描いた絵の模様である。

それに続く、②はその幻の原点の説明、つまり幼馴染の妙子が描いた白馬――桃色の服を着た妙子が乗っている白馬――の絵である。③は何年も使われていた幻の白馬の様子が歳月と共に、変化が生じた描写である。白馬に乗っている人――女の人――が「年取り衰へて、怪しげを増す」というのである。そして④はお仕舞いに、床につくのではなく、椅子に掛けたままの、つまり目が醒めたままの状態でその幻の白馬が見えたという、現か幻か自分の感覚を疑うほど

臺灣大學學術期刊資料庫

の状態である。幻の白馬や白馬に乗っている女の人の変化やその幻と主人公の心理との関係などを明らかにする前に、まず先行研究を掲げておこう。

> （1）以上の、老いの、死の、生の不安としての＜人生のさびしさ＞、そしてそこからの離脱としての処女願望を秘めた回春、そしてその発見における幻視という行為、どれをとっても魔界の要素に当嵌り、「白馬」は川端の魔界文学の中に位置づけられるのであるが、（中略）これ（椅子に掛けたままで見た幻＝引用者注）は謂ば、就眠儀式としての意識的な幻視が真の幻視に変わる事で、眠りの延長である死の徴候を示していると言えよう。それは幻視をその十分条件とする魔界文学の特徴を考えれば、魔界の行為自体の不可能性をも暗示しているのである。[20]
>
> （2）これは彼がもう四十年も会っていないという妙子の死の暗示であり、同時に老境を迎えた野口がとらわれている死の意識が幻覚化したものであろう。[21]
>
> （3）掌の小説「白馬」の基本のイメージは不死につながる〝白馬〟であるが、挿画をもとに一方には「悲惨な死」をもう一方には「不死」がイメージされているのである。[22]

（1）は原善説で、妙子が描いた白馬の絵――「山を蹴る」――という話がペガソスというギリシャ神話を踏まえた話だと論考し、一種の魔性文学と見做している。また「ペガソスはローマ時代には不死のシンボルでもあった。」という不死の要素も見出している。（2）は小林芳仁の説で、「妙子の死の暗示」やそこから野口の老境を迎えている不安や死への意識だという見解である。（3）は森晴雄説で、「白馬」の執筆に当る川端は、東山の絵〈白馬〉から死のイメージを感

[20] 原善「「白馬」論――幻の意味をめぐって――」川端文学研究会（1981.5）『川端康成研究叢書９　魔界の彷徨』教育出版センター、P157

[21] 小林芳仁（1988.10）「美意識―その色彩感覚を中心に―」『川端康成の世界――美と仏教と児童文学と――』双文社、P79

[22] 森晴雄(2011.2)「川端康成「白馬」（掌の小説）論――〝人生のさびしさ〟と〝長い黒布〟――」『解釈』第 47 号 1.2 月号、解釈学会、P46

臺灣大學學術期刊資料庫

じ取ったとみている。また、原善と同じく、ギリシャ神話のペガソスの不死である象徴をも連想し、白馬が不死につながるとも捉えている。

以上の先行研究からでは、さびしさ、不安、老い、死などが「白馬」の捉え方としてほぼ定着していると言えよう。筆者も基本的にはそのような読み方には異議はない。ただし、上掲したテクストのポイント、野口が幻を見るそれぞれの段階や分類から、幾つか気にせずにはいられない点がある。以下、それらの点への考察を通して「白馬」をもっと明らかにすることを試みてみる。

A.眠りの招きとして幻の白馬を使う野口の心理描写

夜中、受験勉強で起きている浪人の息子を、主人公である野口は気がかりで、眠れなくなっている。そこで色々と工夫した結果、小学校に幼馴染の妙子が描いた白馬の絵を思い浮かべたのである。それ以来、「苦しみや悩みのあるたびに、それが習はしとなつた。」（P529）と野口の精神状態が語られている。どんなことで苦しんでいるのか、悩んでいるのかについては言明されてはいない。ただ浪人の息子には「來年があり、希望を持つて」いるという表現からでは、若さに対する野口の羨ましい心境が感じられる。一方、父親である野口は「床のなかでただ起きてゐる。」という描写からは、その空しさが感じられるほか、「息子のためにではなく、自分のさびしさをおぼえたのであつた。」という語りから、眠れないのは息子のことを心配しているのではなく、自分のさびしさから招かれたというのがうかがえる。ここでは野口は父親という意識が背景化している事は明らかであろう。「人生のさびしさに出合つた」野口、息子を前にして自分の老いに気づいた野口はそれらの不安で不眠症にかかったのである。ここまでの捉え方は先行研究とほぼ一致している。

B.「白馬」の登場人物

「白馬」は野口という登場人物に焦点を合わせ、三人称で野口の心理や小学校の幼馴染である妙子と一緒に絵描きをしていた頃の回想などが語られている作品であることは改めて言うまでもない。妙

臺灣大學學術期刊資料庫

子と一緒に遊んでいた場面は野口の回想を通して語られ、深夜起きて受験勉強をしている息子の部分も語り手によって語られていることにとどまっている。つまり、この作品の実際の登場人物は野口一人のみである。「妙子とは別な女と結婚し、子どもができ、年を取つて」いるという描写からでは、野口には息子以外に妻も一緒に住んでいるかは不明である。いずれにせよ野口にとっては妻は極めて薄い存在であることだけは言えよう。息子とは夜中同じように起きている時もあろうが、「息子のためにではなく、自分のさびしさをおぼえたのであつた。」という野口の不安の原因を考えれば、息子との関わりも深くないと考えてよかろう。五十歳を過ぎた、老いを感じ、周りの人とは関わっていないというのが野口の現状である。孤独極まりなく、寂しい状況に陥っている野口は、無意識に他者とのリンクを求めようと工夫している。そこで、幼馴染である妙子と一緒に絵描きをしながら遊んでいたあの小学校の時間、あの記憶が唯一のリンク先であり、慰められる場であり、その場で安らぐことが可能になるのであろう。

C.「白馬」に織り込まれた会話文

上述したとおり、「白馬」は野口の心理描写が中心であるが、回想に出てくる妙子との対話が唯一の会話文である。

> 馬の繪になつた。妙子が天かけるらしい馬をかいたので、野口もかいた。
>
> 「つばさがないぢやないか。」と、野口は言つた。野口の馬には、つばさがついてゐた。
>
> 「つばさはいらないわ。」と、妙子は答へた。「足の爪がとがつてるもの。」
>
> 「妙子よ。乗つてるのは妙子よ。白い馬に桃色の服を着て乗つてるのよ。」
>
> 野口は妙子とは別な女と結婚し、子どもができ、年を取つて、そんなことは忘れてしまつてゐた。（P527、528）

勿論幼い年という点もそのような効果を上げた原因として考えられ

臺灣大學學術期刊資料庫

るが、馬に乗っている妙子の「桃色の服」という設定と呼応しているように会話があどけなく、大変軽快なイメージに感じ取ることができる。後の幻の白馬に乗っている「女子どもでないやう」な様子や黒衣の暗いイメージとは正反対となっている。作品中で唯一生き生きしている場面である。上記の通り、人生の終点に近づいている事からの不安で救いを求めようとする野口は幼い頃の妙子との会話――生命力の源泉の象徴――にエネルギーを得ようと図ったと捉えることができるのではなかろうか。

三、東山魁夷「白い馬の見える風景」

実は東山魁夷は川端の亡くなった年 1972 年に〈白馬の森〉〈芒野〉〈綿雲〉〈渚の白馬〉など一連の馬の絵を創作した。その「白い馬の見える風景」と題した十八点の馬の絵の構想や創作に当り、東山は、まず脳裏にモーツァルトのピアノ協奏曲が浮び、更に画像につながった当時の創作の様子について次のように回想している。

> 思いがけなく一頭の白い馬が、針葉樹の繁り合う青緑色の湖畔の風景のなかに小さく姿を消した。私はこの幻想から一枚の構図を作った。すると、不思議にも白い馬が小さく見える風景が、次々と浮かんできた。こうして、この年に描いた十八点の風景画（習作を含めて）による「白い馬の見える風景」の連作が生まれた。[23]

十八点の作品はいずれも白い馬が小さく描かれており、そのうち 24−28 番の六点は初々しく、清々しく、生命力に満ちている、春のムードが漲っている春景色であるのは明らかである。そして 31 番の〈湖澄む〉[24]と 33 番の〈緑の湖〉は春とも夏とも捉えられる、静謐で和やかな雰囲気の緑一杯の風景である。残りの 29、30、32、34−41 番の十一点は暖色系の風景もあるが、そのモチーフは春の作品と

[23] 東山魁夷（1994.12）『東山魁夷画文集　山河遥か』株式会社求龍堂、P69
[24] 付録に掲げている「白い馬の見える風景」の図はすべて東山魁夷（1994.12）『東山魁夷画文集　山河遥か』株式会社求龍堂により、作品番号も同画集に従っている。

臺灣大學學術期刊資料庫

は異なり、暗いムードが感じられる。それぞれの作品に作者が自ら付けた詩を見てみよう。

29〈夕明り〉　祈りの時が来た／静かに鳴らせ　つりがね草
30〈麦秋〉　麦笛を吹いていたのは誰だったか／遠い六月の記憶
32〈白馬の森〉心の奥にある森は／誰も窺い知ることは出来ない
34〈風吹く浜〉波の打ち寄せる砂浜を廻ると／荒々しい岩礁が海に乗り出していた
35〈渚の白馬〉波の轟きが快かった／かもめの姿は見えなかった
36〈森装う〉　秋の豊かさがある／冬を目の前にして
37〈芒野〉　高原を風が渡る／くぬぎ林が乾いた音をたてる
38〈曠野〉　原野に一羽の鶴が降りたった／すぐ　それは白馬の姿に変った
39〈樹霊〉　森の深みの暗い沼に／毀れた鐘が沈んでいる
40〈荒寥〉　鳥が渡って行った／雲の中に小さく
41〈綿雲〉　再び春は巡ろうとしている／再びあなたは帰らないであろう

ここで最も気になるのは画集の最後にアレンジされた〈綿雲〉(41)という題の作品である。絵に添えた画家の言葉について、石川潤は次のように解釈している。

> 白馬を見送る裸の樹々の中に、一本だけ、常緑の樅が立っている。常緑樹に永遠を、落葉樹に死と再生を託する東山の無常の象徴法が、いつものように深くひそめられようともせず、ここでは直截に裸出している。[25]

「あなたは帰らないであろう」というのは、親友の川端康成を偲ぶ心境を指していると見なすことができ、枯れ木が春の訪れとともに

[25] 石川潤「雪月花の時――川端康成と東山魁夷」監修:川端香里男(2014.4)『巨匠の眼　川端康成と東山魁夷』株式会社求龍堂、P357

臺灣大學學術期刊資料庫

またその命が蘇ることになろうが、「あなた」は再び戻ってくることはない。とはいえ、横に立っている一本だけの樅の木のように「あなた」が永遠の存在だというのを東山は表現しようとしているのだという石川潤の見解である。となると、空を駆けている白馬と樅の木との関係はどのように考えたらよかろうか。それは、空の白馬は既にあの世に去っていった川端のことであり、そして枯れ木の間にあるたった一本の樅の木は親友の東山をはじめ、沢山の人の心の中に残っている、不死の川端の象徴と見なすことができよう。

さて、ここではこの節の冒頭に掲げた東山の「白い馬の見える風景」に挙げた自らの説明の一節と、川端「白馬」の幻想の描写を合せ考えてみよう。

・一頭の白い馬が、針葉樹の繁り合う青緑色の湖畔の風景のなかに小さく姿を消した。[26]

・なら木立に宿つてゐた、銀の光がふうつと消えた。しげりあふ葉のみどりが黒ずんだ。その木立の木ずゑから、白い馬が飛び出すと、灰色の空をかけつた。(川端「白馬」P527)

東山の白馬の一連創作の発想は、川端の「白馬」に描かれている主人公である野口の白馬の幻想の状況を彷彿とさせるとも思える。となれば、川端が亡くなったあと、東山は「白い馬の見える風景」の創作に当り、かつて川端と絵画と文学の交流の一環としてかかわった「白馬」の内容を意識していた可能性は十分にあるであろう。つまり、「再び春は巡ろうとしている／再びあなたは帰らないであろう」という 41 番の〈綿雲〉の詩を合わせて読めば、〈綿雲〉に描かれている空を駆ける、或は消えていく白馬を川端の象徴として見なすことが出来よう。

上掲した後半の十一点の白馬の絵は、すでに言及した〈綿雲〉を除き、他には川端を偲ぶ象徴と見なすことができるのは何点あるだろうか。30 番〈麦秋〉の「麦笛を吹いていたのは誰だったか」とい

[26] 東山魁夷『東山魁夷画文集　山河遥か』(1994.12) 株式会社求龍堂、P69

臺灣大學學術期刊資料庫

う前の句からでは、幻聴を、38 番〈曠野〉の「原野に一羽の鶴が降りたった／すぐ　それは白馬の姿に変った」という詩からでは、幻想をそれぞれ捉えられ、つまり川端の「白馬」の構想に相通じる点がうかがえよう。40 番〈荒寥〉は岩ばかりの寂しい風景の遠景に一頭の白馬が寂しそうに佇んでいる。「鳥が渡って行った／雲の中に小さく」という東山の詩を合せ考えれば、曠野を飛んでいる鳥さえ姿を見せなくなっているほど、佇んでいる白馬の寂しさがこの絵のモチーフだと考えられよう。

残りの、32、34、35、37、39 番など五点の作品は結論から言えば、共通している点が見られる。一点ずつ見ていこう。

32〈白馬の森〉は森を主役とも見なすことができ、近景の何本かの木の幹がクローズアップされ、森の中の木々が全部枯れている。その奥の方の隅に白馬が描かれている。

34〈風吹く浜〉は一面と波が荒々しく立っている海辺に一頭の白馬が右端から左に向って走っている絵である。

35〈渚の白馬〉はカンバスの主役のような海にオレンジ色や紫色、赤などの夕日の色で一面塗られ、海に近い空に夕日が掛かっており、そして近景の右に偏っている海辺を白い馬が駆けているのが描かれている。時間は異なるが、34 番の〈風吹く浜〉のモチーフを彷彿とさせる。

37〈芒野〉は芒がカンバス一面に描かれている秋のちょっぴり寂し気な風景の中、右に偏っている遠景に白い馬がゆっくり歩いている絵である。芒が茂っているため、角度によって、馬の姿が見えなくなる可能性もある。

39〈樹霊〉は近景には幹が異常に大きい枯れた木が配置され、その後ろも一面と枯れた木が描かれている。そして、左のやや遠景に、つまり枯れた林の中に白馬が一頭俯いている。「森の深みの暗い沼に」という句からでは、白馬は決して明るい位置ではなく、暗い状況に置かれていることは明らかであろう。

以上の五点の絵には共通しているところがある。森の木々にせよ、

臺灣大學學術期刊資料庫

海にせよ、芒にせよ、白い馬がそれらに融け込んでいる感じが薄い。森の同じ枯れている木々、一面に広がっている海、同じく一面に広げられている芒はいずれもそれらの風景の要素は同類というイメージが強い。最初に挙げた〈綿雲〉の雲や枯れ木と同じく、それらの自然要素が同じ類であることは明らかであろう。それとは裏腹に、白い馬がそれらとは異質のような存在に見える。殊に 32〈白馬の森〉と 37〈芒野〉に描かれている白馬はその異質のような存在からもたらした戸惑いや孤立感、不安などの雰囲気は川端「白馬」の主人公、野口の心境にぴったりしているのは明らかであろう。〈綿雲〉の白い馬が川端の象徴と見なせるように、〈白馬の森〉〈風吹く浜〉〈渚の白馬〉〈芒野〉〈樹霊〉に描かれている白馬も親友の川端を偲ぶつもりで川端の象徴としながら、東山が「白い馬の見える風景」の創作に臨んでいた時に、頭の中で川端の作品「白馬」への更なる答えとしてそのように構図していたと考えられるのではなかろうか。

四、結び

「川端の文章は要所要所で驚くほど映像的であり、その視覚的強度は現在でも斬新さを失っていない。」[27]という石川潤の見解が示しているように、「白馬」という作品の冒頭の風景描写にも視覚的な要素が強く感じられる[28]。その他、以上考察してきた通りに、川端の提案で画家東山魁夷との間で絵と文学との交流の発想の下で完成した「白馬」という掌編小説には挿絵〈白馬〉以外に、川端が逝去したその年 1972 年に親友川端を偲ぶ心境の現れとして創作した東山の〈綿雲〉を始めとする一連の白馬の絵画が存在する。挿絵を除い

---

27 石川潤「雪月花の時――川端康成と東山魁夷」監修:川端香里男（2014.4）『巨匠の眼　川端康成と東山魁夷』株式会社求龍堂、P353

28 例えば、「日が今沈んだやうな色であつた。ならの葉のなかの銀の光は、木立の向うに浮ぶ小さい白雲が、入日を受けてかがやいてゐたのだつた。木立の左に遠い山波は淡い紺色一色に暮れてゐた。」（P527）という「白馬」の主人公野口の幻想が起る前の風景描写は大変視覚的な描写であることは明らかであろう。

臺灣大學學術期刊資料庫

た外の白馬の絵画は文学作品の「白馬」と直接に関連があるとは言い切れないが、東山〈白馬〉⇒川端「白馬」⇒1972 年の東山の一連の白馬の絵画、という創作時間の関連性をも考察の射程に入れてみれば、画家（視覚的）⇒文学作家（言語）⇒画家（視覚的）という画家と作家による交響を「白馬」で感じることができた。そのような交響の下でできた川端の「白馬」は以下のように捉えることができた。

・他者とのリンクの象徴である白馬

「白馬」には、小学校時代の幼馴染の妙子と一緒に絵描きをしていた頃の回想以外に、野口一人しか登場人物していない。家族との関わりの匂いが大変薄い野口は孤独、孤立、更に老いの不安に陥っている。そこで妙子が描いた絵白馬の幻想を通して安らぐことができた。東山の〈白馬〉に描かれている白馬は天に向かって走っている絵である。そこで川端は白馬の駆ける姿を時間と捉えているようで、主人公野口が老いを感じていると作品の中で語られているのである。川端は白馬を時間のシンボルだけに止めず、更に、幼馴染と過ごしていた楽しい時間の回想、そこで生命の泉と再会、エネルギーの獲得、他者とのリンクと、そのような束の間である記憶に浸る安堵感を味わい、安らぐことができた己の心境との媒介へと高めているのである。

・ 自由／不安／孤独の象徴である白馬

時間の軸に沿って考えてみれば、「白馬」の中の回想の部分、つまり子供の頃に描いた白馬は、乗っている女の子が着ている桃色の服の暗示のように性的、青春、自由奔放というイメージにつながる、自由の象徴と言えよう。

一方、幻の白馬に乗っているのは最初から「女の子ども」ではないと語られ、更に歳月と共に、乗っている女の人は、妙子の絵にある桃色の服とは正反対で、「年取り衰へて、怪しげを増す」ように変わっていく。乗っている人を白馬の一部と見なせば、幻の白馬は老い、そこからもたらした不安のの象徴とも言えよう。

臺灣大學學術期刊資料庫

更に、画家東山が川端の逝去した 1972 年に、川端を偲ぶ心境で白馬を川端の象徴として描いた〈綿雲〉や、その他の一連の白馬の絵を考え合わせれば、白馬は孤独の存在とする象徴でもあろう。つまり白馬は野口であり、作者川端自身でもあるのであろう。

・昇天性のシンボルである白馬

東山が川端を偲ぶために描いた〈綿雲〉も〈白馬〉もその馬が空を駆けている模様である。川端の作品「白馬」に語られている妙子の絵の馬も空を駆けている。東山の「白い馬の見える風景」に描かれている白馬の絵のうち、空を駆けているのは川端を偲ぶ趣旨の〈綿雲〉一点しかない。つまり、空を駆ける白馬は川端の「白馬」に応えたものと考えるべきであろう。この時期に川端が創作した「夕映少女」の「少女の自轉車はそれを夕日に向つて走つて行つた。今に地を離れて、夕焼の空へ浮び上つてしまひさうに見えた。」[29]という、ヒロインである阪見少女への描写の一節と相通じている点がうかがえる。それは川端文学に時々見られる「昇天」への憧れ[30]という点である。つまり、「白馬」の空を駆ける白馬にはまた昇天性のシンボルも見られよう。

川端康成が大変傾倒し、懇意にしていた画家の一人である古賀春江のことについて、「古賀春江と私」という一文の中で「古賀の詩も繪も楽しく、幻想に童話がある。」[31]と称賛している。これまで論考したように、川端自身もある意味では古賀春江と似通い、絵と詩(小説やエッセーなどの文学)の対話を試していたと推測できる。ただ、

---

29 『川端康成全集』第 5 巻、P560

30 主人公、殊に少女の「昇天する物語の構造」は、川端が少年時代から愛読していた古典の一つ『竹取物語』のかぐや姫の昇天を彷彿とさせ、その中にある「聖處女崇拝、永遠の女性の讃美」と相通じていると見なすことができよう。「夏の靴」という掌編小説の最後の「少女は靴を履くと、後をも見ず白鷺のやうに小山の上の感化院へ飛んで歸つた。」(『川端康成全集』第 5 巻、P113)という描写もそのようなイメージが感じられる。詳しくは范淑文「川端文学における絵画の働き――「夕映少女」・「月下美人」を例にして」《台大日本語文研究 32》／台大日文系

31 『川端康成全集』第 27 巻、新潮社、P539

臺灣大學學術期刊資料庫

川端の場合は自分一人ではなく、画家東山魁夷との協働創作で、文学と絵画との交響をより高次元において奏でようとしたのではなかろうか。

【付記】本論文は、科技部専題研究計画 MOST 104-2410-H-002-126-MY2 の研究成果の一部である。

【テクスト】 『川端康成全集』全 35 巻、1999.11、新潮社

【参考文献】

石川潤「雪月花の時――川端康成と東山魁夷」監修:川端香里男（2014.4）『巨匠の眼　川端康成と東山魁夷』株式会社求龍堂

上田渡（1999.5）「川端文学と絵画」『川端文学の世界４　その背景』編者：田村充正・馬場重行・原善、勉誠出版（株）

小林芳仁（1988.10）『川端康成の世界――美と仏教と児童文学と――』双文社

斎藤一（1964.11）「覚え書」佐藤春夫『詩文四季』株式会社　雪華社

富岡幸一郎（2014.5）『岩波現代書　031　川端康成　魔界の文学』岩波書店

原善（1981.5）「「白馬」論――幻の意味をめぐって――」川端文学研究会『川端康成研究叢書９　魔界の彷徨』教育出版センター

羽鳥徹哉・原善（1998.6）『川端康成全作品研究事典』勉誠出版

范淑文「川端文学における絵画の働き――「夕映少女」・「月下美人」を例にして」《台大日本語文研究 32》／台大日文系

東山魁夷（1994）『東山魁夷画文集　山河遥か』求龍堂

兵藤正之助（1991.9）「川端康成と美術」『国文学解釈と鑑賞』56 巻 9 号、至文堂

臺灣大學學術期刊資料庫

森晴雄（2007.12）『川端康成『掌の小説』論』龍書房

森晴雄(2011.2)「川端康成「白馬」（掌の小説）論――〝人生のさびしさ〟と〝長い黒布〟――」『解釈』第 47 号 1.2 月号、解釈学会

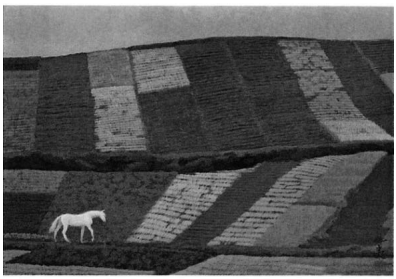
【付録】



〈白馬〉[32]



29〈夕明り〉



30〈麦秋〉



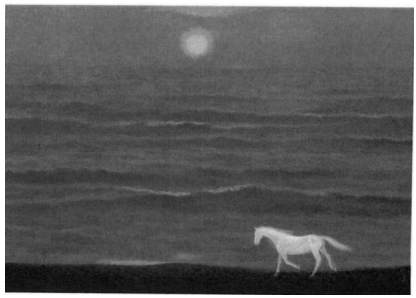
32〈白馬の森〉

[32] https://www.google.com.tw/search?q=%E3%80%80%E7%99%BD%E9%A6%AC%E3%80%80%E6%9D%B1%E5%B1%B1%E9%AD%81%E5%A4%B7%E3%80%80%E3%83%BB%E5%B7%9D%E7%AB%AF%E5%BA%B7%E6%88%90&tbm=isch&tbo=u&source=univ&sa=X&ved=0ahUKEwjy_8bqtaTYAhUBGZQKHZedDqAQ7AkIOQ&biw=1280&bih=918（2017.10.30 閲覧）

臺灣大學學術期刊



34〈風吹く浜〉



35〈渚の白馬〉



36〈森装う〉



37〈芒野〉

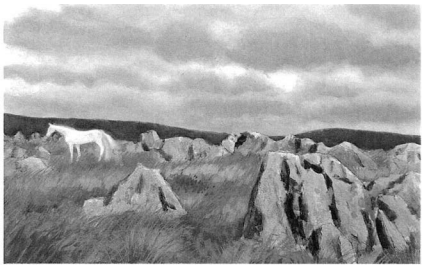


38〈曠野〉



39〈樹霊〉

臺灣大學學術期刊資料庫



40〈荒寥〉



41〈綿雲〉

臺灣大學學術期刊資料庫